

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 動物応用科学科

職階 准教授

氏名 宗綱栄二

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

動物病態学：免疫疾患、循環障害、腫瘍、妊娠期栄養不良といった多角的な観点から病態を深く理解することに努めた。この講義により学生は各疾患の背後にある基本的な生物学的プロセスや相互作用を把握し、その結果として現れる病態の全体像を捉えることができたと考えられる。講義では細かな知識の羅列にとどまらず、病態を形成する根本的なメカニズムの大枠に焦点を当て、学生が包括的な理解を深めることを重視した。また最新の研究成果も講義に取り入れた。アンケートの質問を答えることで双方向の授業の実践に努めた。

専門ゼミ：研究の基礎を固めるために、関連文献の収集とレビュー、および研究計画の策定等を行った。学生が研究テーマについて深く理解し、問題意識を持って今後の研究に取り組めるように解説・講義を行った。

基礎ゼミ：学生にキーワードを提示させ、それを基に各自でテーマを設定した。またプレゼンテーション資料の作成方法、構成、話す速度を含む口頭発表の基本技術について指導した。

毒性学一危機分析実習：特定の化合物や物質が動物個体へ及ぼす悪影響を理解することを目指した。毒性学実験では、標本の観察や麻酔の作用時間を評価するための動物実験を行った。学生が本実習を通じて化学物質のリスク評価への理解を深めるように努めた。

| 科目名 | 学科・専攻 | 単位種別 | 配当年次 | 受講者数(単位:人) |
|---------------|------------------|------|------|------------|
| 動物生命科学特別演習Ⅳ－Ⅱ | 動物応用科学専攻 | 選択 | 1 | 1 |
| 動物生命科学特別研究Ⅳ－Ⅱ | 動物応用科学専攻（博士前期課程） | 選択 | 1 | 1 |
| 科学の伝達 | 動物応用科学科 | 必修 | 3 | 4 |
| 専門ゼミ | 動物応用科学科 | 必修 | 4 | 3 |
| 卒業論文 | 動物応用科学科 | 必修 | 4 | 4 |
| 実験腫瘍学特論 | 動物応用科学専攻（博士前期課程） | 選択 | 1 | 1 |
| 動物病態学 | 動物応用科学科 | 必修 | 2 | 133 |

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

単に知識を蓄積するのではなく、その知識を実社会のニーズに応える知恵へと昇華させる能力を身につけることに重点を置いている。そのために、基礎力を徹底し、理論だけでなく実践的なスキルも同時に養う教育を提供する。学生一人ひとりが持つ潜在能力を最大限に引き出し、それを社会が直面する課題の解決に役立てられるよう導くことを目標としている。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

知識を単なる蓄積に留めず、実社会の課題を解決する「知恵」へと昇華させる。確かな基礎力を土台としながらも、常に「この知識は社会のどこで役立つか」を問い続ける演習や対話を重視し、生きたスキルを養う。自らの学びが他者や社会の力になる喜びを実感させることで、個々の潜在能力を最大限に引き出し、変化の激しい時代を主体的に切り拓く人材を育成することに全力を注ぐ。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

動物病態学の授業において、2回に1度の頻度でアクティブ・ラーニングを取り入れている。授業終盤にテスト形式の問題を提示し、その半分を学生自身に作成させ、作成者が解説を行う。

(2) ICTの教育活用

無

講義スライドにQRコードを組み込み、学生がそのコードをスキャンしてアクセスするオンライン設問に答えることで、リアルタイムで学生の理解度を把握することを予定している。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

最新の論文や実験結果を提示している。

(2) 学生の理解度の把握

B

授業中、重要な概念について学生を指名し、口頭で説明させることで理解度を把握している。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

学生の自発的な学習を促すため、関心を引く話題を提供している。学生が自学自習により深い理解を得ることを奨励している。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

授業中、重要な概念について学生を指名し、口頭で説明させることで理解度を把握している。

(5) 双方向授業への工夫

A

学生が主体的に参加する討論を授業内で行うことで、双方向の学習環境を実現する予定である。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

該当なし

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

前年度の授業スピードが速かったため、重要な点は時間をかけ丁寧に説明した。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

前年度よりテスト結果の改善が見られた。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

本年度と同様に基礎的事項を丁寧に説明する。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

動物病態学の授業では、学生の成績向上を目的として、テスト形式の問題を学生自身に作成・解説させるアクティブ・ラーニングや、授業中の指名による口頭説明を継続的に実施してきた。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

問題作成や解説を行う過程で理解の浅さに自ら気づく機会が増え、定期試験における応用問題の正答率向上が認められた。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

FD研修会に参加した。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

教育活動に関する今後の目標は、生徒が興味を持ち、参加意欲を高めるような授業を行うことである。また、基礎事項の理解を徹底させ、学生が知識を深くかつ確実に身につけられるようにすることも目指す。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

該当なし。